図書館だより

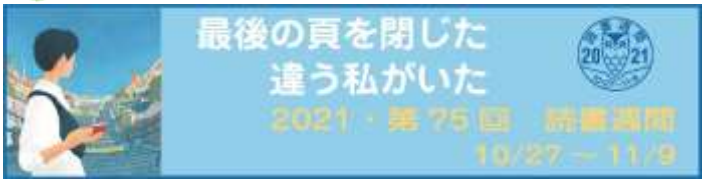
令和3年11月4日　読書週間号②

図書館こぼれ話

図書館の穴場スポットとして秘かに人気なのが本棚の奥にあるスツール。本に囲まれながら読書のひとときを楽しむことができます。ぜひ座り心地を試してみてください。

10 月前半はまだ半袖を着られるほどの気候で「秋はいつやって来るの？」なんて思っていましたが、半ば過ぎから一気に秋が深まりました。体感も「涼しい」から「寒い」に変わってきたので、あたたかくして過ごしましょう。図書館にはあったかスープのレシピ本もたくさん揃っています。これからの季節はお弁当にスープを持ってくるのもいいですね。今いちおし本は『**基本調味料で作る体にいいスープ**』です。具だくさんでおいしそうなスープがたくさん載っています。手が込んでいるように見えて作り方も簡単。早速作りたくなります。

読書週間後半も本を楽しみましょう!!



新着コーナーでは『**コーヒーが冷めないうちに**』シリーズの最新作 913.6-カ『**さよならも言えないうちに**』がおすすめ！

10月29日（金）から始まった読書週間も後半に突入しました。みなさん自分好みの本には出会えたでしょうか。

先月7日に発表された2021年ノーベル文学賞は、タンザニア出身、英国在住の作家、アブドゥルラザク・グルナさんが受賞しました。グルナさんの小説は移民・難民の苦難を一貫したテーマとなっています。これまで日本語に訳されたものは出版されていませんが、この機に日本語訳が出版され、私たちもグルナさんの作品を気軽に読むことができるようになるといいですね。

さて、今回の図書館だよりも読書週間号その2として【**読んでみる前と後、変化を感じられる本**】を紹介していきます。最後の頁（ページ）を閉じた時、自分の中に起きた変化を感じてみてください。

●知らなかった世界と出会える本

489-タ 『海獣学者、クジラを解剖する。』
田島 木綿子 ‖ 著　山と渓谷社

海岸に打ち上げられたクジラやイルカの死体。そうした海の哺乳類の死を無駄にせず、多くの情報が眠る体を調査したり、数百年後まで保管できるよう標本にしたりする仕事があります。著者の田島さんも知らせが入る度、各地に駆けつけ、解剖から標本作りまでこなしています。汗まみれで働く現場の様子は興味深く、楽しみながら読んで海の哺乳類の生態も学べる本。

B913.6-マ 『デフ・ヴォイス　法廷の手話通訳士』
丸山 正樹 ‖ 著　文藝春秋

主人公の荒木は“耳が聴こえない両親を持つ、耳が聴こえる子ども”として様々な思いを抱えながら大人になった一人です。手話通訳士として働き始めた荒木は訳あって過去と現在、ふたつの事件の真相を追うことになります。ミステリーでありつつ、聴こえない人たちを取り巻く状況を自然と知る大切な機会になる作品でもあります。手話には2種類あることをみなさんは知っていましたか。

●旅に出かけてきた気分になれる本

290-コ 『今こそもっと自由に、気軽に行きたい！海外テーマ旅』　小林 希 ‖ 著　幻冬舎

訪れた国は60ヵ国以上という著者が「このテーマでこの国を旅してみよう！」と決めて出かけた旅の記録。バルト三国を雑貨でめぐるバス旅、スペインのバスク地方でとことん肥える旅、キューバで色彩の街を撮って民泊する旅、様々なテーマで世界中を旅する様子をたくさんの写真と共に紹介しています。見て、買って、食べて、どれも魅力的で楽しそうな旅！

596.2-バ 『ムイト・ボン！ポルトガルを食べる旅』
馬場 草織 ‖ 著　産業編集センター

「ムイト・ボン！」はポルトガル語で「とってもおいしい！」という意味。この本は書名のとおり、覚えきれないほどたくさんのおいしそうな料理が登場します。その味わいだけでなく、料理を通して人々のぬくもりが伝わってきて、「ポルトガルって、いい所だなぁ」と感じます。可愛い器やお洒落な街並みも魅力的。読み終わる頃には、すっかりポルトガルの虜になっています。